

分かちあいの会で語りを「聴く」作業について

— 遺児たちの「自分史語り」のばあい —

The Essence of “Listening”

— Presentation and Recognize —

時 岡 新

Arata TOKIOKA

はじめに.

本稿は、前稿（時岡 2006）の姉妹編である。しかし、主題は別にあり、独立した論考でもあるから、研究の対象については必要のかぎりを記しておかなければならない。

以下でみる遺児たちの「自分史語り」、およびそれを含む「つどい」とは、保護者等が死亡、または著しい後遺障害にある高校生、大学・専門学校生の修学を支援するある奨学団体が、奨学事業とあわせて行う催しである（高校生 3泊4日、大学・専門学校生 5泊6日）。高校生の「つどい」では大学・専門学校生が、大学・専門学校生のそれでは上級生がそれぞれリーダー、シニア・リーダー、および運営リーダーなどとなり、プログラムの進行を担う。そのなかの特定の一日、特定の時間帯を区切って、参加者たちが死別やその後の体験、心情などを語り、聴きあうのが“自分史の時間”である¹⁾。

“自分史の時間”は、始めに参加者全員があつまり、先導役が話す。その詳細は前稿にみたとおりである。その後、10~15人ほどの「班」に分かれ、シニア・リーダーが司会して、高校生の「つどい」では大学一年生の務めるリーダー、大学・専門学校生のそれでは

二年生の務めるリーダーから話しはじめる。本稿では、班ごとの語りあいではシニア・リーダーが担う「聴く」作業に照準し、その特質を明らかにしたい。

遺児たちの自分史語りは、綜じていえば遺児どうしが互いに語り、聴くことで体験や心情を思い返し、ときにそれらの対象化、相対化にいたる過程である（時岡 2004）。とはいえ、語りあいの場に同席した経験から、筆者には、参加者の語りが実質的に向かう先はシニア・リーダーであると判ぜられてもいた。そこで本稿では、まずシニア・リーダー経験者に訊いて、聴き手としてのかれらの実践を詳らかにし、“自分史の時間”の諸過程をいっそう実情に沿うよう理解することに努める。本稿で得られた知見は、この先、参加者の“語る”作業の詳細な解析へと接続される予定である。

本稿の課題にそくして、以下では、遺児であるシニア・リーダーとともに、遺児でないシニア・リーダーにも訊いて、かれらの「聴く」作業への接近をはかる。属性が本質的に同じである聴き手のみ解析したのでは、聴き手としてシニア・リーダーの占める位置は特異でないとの見方をじゅうぶんに排除し得な

いからである。

遺児であるシニア・リーダー経験者は、CさんとK君である。かれらには、おもに「聴く」作業に臨む心がけや種々の工夫を訊く。遺児でない経験者は、F君である。かれは最初のインタビューの一年ほど前から、ボランティア・スタッフとして街頭募金など遺児たちの活動に参加してきた。大学生、高校生の「つどい」にも参加し、運営リーダーを務めた。第1節前半では、この頃のF君に訊いている。さらに一年後、F君は高校生の「つどい」でシニア・リーダーを務めたいと申し出た。かれの下した判断を第1節後半で訊く。続くF君の実践を訊く前に、かれの判断の一般性、妥当性を確認する目的からも、第2節でCさん、K君の二人に訊こう。その後、第3節で、F君の仕事ぶりを紹介したい²⁾。

1. 意義と条件

遺児たちと出会っておおよそ一年の後、F君ははじめて、大学生の「つどい」に参加した。参加者の受付や諸事務、行事を支える運営リーダーの一人としての参加であった。かれは熱心に務め、また遺児ではない自身の存在についてあらためて考えたという。本稿の関心に添って、分かちあい（「つどい」全体）、語りあい（“自分史の時間”）の場への関与について訊いた。F君「やっぱり親を亡くした人たちがやってる活動なんだなって、基本はそこなんだっていうところで。それが分かかったときに、僕みたいな立場、ボラスタ〔ボランティア・スタッフ〕っていうのは、親を亡くしていない立場で、どういふかわり方をしていくべきだろうと考えさせられ〔ました〕」。またかれに印象的なのは、自分史を語る時間の前と後で見た参加者の「表情の違い」だったともいう。語りあいの場には同席していない。むしろそれゆえ、前後の変

化を「すごい感じるんですよ」と。

これらの述懐は、ただし、遺児たちの語りあいの場をまったく見知らずに言われたものではない。大学生の「つどい」を経験した遺児たちは、それぞれの地域で独自の活動を継続している。F君の住む地域では、小学生から中学生までの遺児やその母親らを対象とした「つどい」を行っていた。それに参加したF君は、その準備段階で研修をかねた“自分史の時間”を経験したのだという。そのときの様子を訊いた。

F君「僕の入った自分史〔語りのグループ〕は、自分史経験者曰く、〔進行を確認するための模擬的なものではなく〕ほんとに自分史みたいな自分史〔大学生の「つどい」で実際に行われる語りあいのよう〕だった、っていうことなんですけど。ほんとに、自分の感情をさらけ出して。そのなかで感じたのは、やっぱり、みんな大学生だったっていうのと、みんな一度、吐き出しであったりふり返りであったり、そういうのを経験してる分、〔遺児でない自分が同席することに〕抵抗はなかった。壁はなかった、っていう感じですかね。〔筆者、壁がないのはなぜだと思うか、と重ねて訊いた〕うーん、ひとつに、ま、みんなそれぞれ、一度『つどい』っていうのを経験してて、自分〔かれら〕なりに自分の経験を受け入れられてる段階にいる人たちの集まりだったっていうことと。あとは、僕も、親の喪失体験っていうのは無いんですけど、〔中略〕僕自身も、過去、つらかった経験とかがあって、〔F君もそれを話すことによって〕過去のそい

う経験、つらいことがあったっていうのを素直に分かちあえたっていう感じで」。

遺児たちの分かちあい、語りあいに接した二度の経験から、F君はこのときまでに、その場にたいする自らの関与について大別ふたつの判断を得ている。すなわち、遺児でない者の参加には「危険がつきまとう」ものであり、そのかぎり、語りあいの場に同席するべきではない。とはいえ、相当の条件が整えば、遺児たちとの語りあいは「できると思ってる」し、またそれには意義がある。以下、それぞれを詳しく訊こう。

かれが語りあいの場への参加を適切でないかと判ずる手がかりは、かれが聞いた遺児の日常の経験のなかにもあった。ある電話連絡の機会に、「つどい」に参加する数日前の遺児の気持ちを聞いたのだという。F君「〔用件が済み〕ほかに何か不安はない？ とかそういう話で、その子が言ってたことなんですけど。〔中略、誰かに訊かれて、自分には〕親がいないっていう話をしたときに、〔訊いてきた〕向こうは、親がいないってことを知らなくて、『ごめんなさい』とか言われたり。そういう〔やりとりをした時や〕、父の日とか、そういう〔時に〕、自分はほかの人と同じじゃないんだなってことをすごく感じた、っていうことを言ってたんです。だから〔遺児たちにとって〕自分の思いは、ほかの普通の人たちに理解されないものなんだっていう意識は強い〔とします〕」。かりに、語りあいの場に“普通の人”すなわち自分がいたとしたら、それだけで話しにくいと感じる参加者もいるだろう、とF君は考えた。

ならば、と筆者は訊いた。遺児ばかり集まると、なぜ話せるのだろうか。F君「誰でもそうだと思うんですけど、自分に辛かった経

験があって、たとえば、目の前にいる人が自分と同じ経験を持ってることが分かってたら、何か、話しやすいことないですか。そういう安心感っていうか、『つどい』にかきらず、“心のケア”っていう場所では、〔そこが〕安全な場所っていうところが絶対条件だと思うんです。〔中略〕みんなが自分と同じ経験、似たような経験をしてて、安心できるからこそ話しやすいってこともあると思うし」。遺児どうしの語りあいにたいするこのような認識は、F君のなかで、前段でみた遺児たちの自己概念をめぐる認識と親和的に接合される。

催しの企図に照らしてF君は考えた。「つどい」では、なにより「今までため込んできたものの吐き出しであったり、過去の整理、ふり返りっていうのが一番、大事にされるべき」である。それは遺児どうしあつまることによって醸成される、かれらの言うところの安全、安心という心情に支えられて実現される³⁾。したがって、その妨げともなりうる試みは、あらかじめ避けられるべきである。

たほう、そうした判断をふまえつつも、F君が自らの語りあい、分かちあいの場にかかわる意義をみとめるゆえんは次のとおりである。

F君「〔高校生である遺児たち〕にたいする気持ちなんですけど。ま、立場っていうのは違うじゃないですか。遺児だとか遺児じゃないっていうところで。ただ僕は僕なりに、親はいるけど、ま、いろんな経験があって。将来的には〔中略〕カウンセリングみたいなこともやっていきたいな、っていうのがあって。遺児だとか関係なく、〔かれらに〕伝えたいことっていうのがあるんです。ひとつに、

やっぱり、親の喪失体験を人に話せなくて、自分のなかに閉じこめてる子らっていうのもいるし。この前、親のいない子と話したときに、お父さんがいないけどお父さんがいるって言って、仕事してるよとか嘘ついてた、って話を聞いたり。そういうのを聞いてて、なんで話せないんだろうとか。自分のなかに閉じこめて、簡単に言えばすごい苦しんでるっていうか。そういう子らにたいして、素直にそういう気持ちを表現してほしいし、そういうのを出しても大丈夫な場所があるんだよっていうことを知ってほしいし。そういう気持ちっていうのを受けとめてあげたいし。理解してあげたいし。僕みたいな立場だからこそ言えることだと思うんですけど、『つどい』で、みんなが遺児っていう場だからこそ話せるっていうところもあると思うんですけど、それ以外、社会〔日常〕生活に戻ったときに、周りにいる人間っていうのは、遺児じゃない人の方が多いじゃないですか。そういう場に出ても理解してくれる人はいるんだよ、ってことを知ってほしい」。

F君のさまざまな希求について、その来歴を詳らかにすることは本稿の主たる課題ではない。照準すべきは、かれがそれらを実践する場として「つどい」は適当であると判じた事由である。筆者は言葉を換えていく度も訊いた。かれの応えは一貫して、「つどい」にたいするひとつの理解を示すものだった。曰く『『つどい』っていう場所をきっかけにして、〔参加した遺児たちの視野が〕外へ広がっていくっていうのが〔「つどい」の〕目的な

んじゃないかな』。かれはまた、これと組みにするかのように、「遺児っていう場所を居場所にしてしまわないでほしい』『『つどい』を居場所にしてしまってはだめだ』とも言った。かれは“外”と“居場所”の語を対照的に用いて、そのあいだにかれ自身を置きながら種々の判断を得ているようである。

それらふたつの言葉を導きの糸に、F君のいう分かちあい、語りあいの場におけるかれの存在の意義を、いっそう詳しく解釈したい。遺児たちの「つどい」を指して言う“居場所”の語は、分かちあいのために用意された「つどい」の場が、時として参加する遺児たちの過剰な甘えをゆるすさまを表している。筆者の知るところを補っていえば、催しを運営する遺児スタッフたちにも、かれら自身の情動的経験が好例ともなって、「つどい」のもつそのような傾向はよく承知されている。それは、先にみた安全、安心の心情を醸成しようとする工夫の副産物として、なかば必然的に生みだされる。F君もそれをよく解しながら、しかし努めて状況を改変するべきであると考えている。

具体的に、どのようにすればよいか。有力な方途のひとつが“外”との連絡であるという。遺児たちには不快な経験の記憶がある。それはかれらのなかに、自分たちは特異であるといった自己概念を構成させる。遺児である参加者たちが「つどい」で感じる心地よさや前段でみた過剰な甘えは、かれらの自己概念に依って成立している。これを変えたい。そこでF君は、遺児でない自分に死別の体験やその後の心情を話してみしてほしいと提案する。そのようにして遺児の気もちを大切に思う者がいることを、実地で知ってほしい。遺児でない者への評価がわずかなりと好転すれば、あるいは、遺児としての自己概念も改編されるかもしれない。F君はこのとき、遺児

でない者のひとりであると同時に、遺児たちとそうでない者たちとのあいだを架橋する役回りを務めたいと願っている。

前段までにみたいろいろの意義と、遺児たちの語りあいに自らが同席することの危険とを、この時点でF君はどのように斟酌するだろうか。F君「僕が言ってるような“外への拡がり”っていうのは、たとえば、親との死別体験を一度も話したことがないっていう人に、いきなり求められるものではない。いきなりその段階にまで持っていけない。「とりあえず、自分を受け入れてもらえる場所があって、とりあえずそこ〔「つどい」〕でそういう、きっかけを得た段階だから」。F君が同席した語りあいの場は「自分〔かれら〕なりに自分の経験を受け入れられてる段階にいる人たちの集まり」であった。またそれは小学生、中学生や母親らを対象とした「つどい」にむけた研修の一環でもあった。そこで語りあう遺児たちは、かりにF君のいう“段階”が妥当な表現であるとするならば、遺児でない者たちとの語りあい、分かちあいも不可能でない段階にいたっている。しかし「つどい」に参加する一般の遺児たちは、そうではない。こうして、「つどい」における語りあいの場へのF君の関与は、今はひとまず、見送られるべきと判じられたのである。

むろん、いうまでもなく不足はF君の側にもある。先の引用でもわずかにふれたが、かれが「つどい」の語りあいに参加することになれば、一般参加者としてではなく、聴き手として任にあたることになる。参加者の“段階”などといった事情とは異なる次元で、F君自身、聴き手としてもとめられる諸点をみたくなくてはならない。

遺児たちの語りあいの場にたいする関与をめぐって、F君は引きつづき、それらの諸点をいろいろに熟考し、何人もの遺児たちと意

見を交わした。自分が聴き手を務めることには意義がある。それを達成するために整えるべき条件は、どのようなものであるか。紙幅の制約から、思索の過程は措き、F君の熟慮の果実を訊くことにしよう。

はじめての「つどい」に参加してから、さらに一年の後。「立場の問題を越えるだけの力をつけて、一年後に臨んでやろうっていう志」をもって遺児たちとの交流をつづけてきたF君は、今やあらたな判断を得るにいたり、高校生の「つどい」でシニア・リーダーを務めたいと申し出た。それは班ごとの“自分史の時間”で司会進行を担う、誰もがみとめる重任である。かれは自らの役割を「聴く」ことと思ひ定め、現在の自分であればその任をまっとうできると結論した。詳細は次のとおりである。

すでに、本節前半でも確認したとおり、遺児たちにとって語るという作業は、自らの自己概念を表出し、相対化し、ときにはその改編にいたる契機である。そうした語りを促す条件の一つが、これも先にみた「安心感」の醸成であり、それは似通った自己概念をもつ遺児たちが聴くことで達成されると考えられていた。では、遺児でないF君が聴き手を務めようとするならば、どのようにして語り手たちに「安心感」をもたらすことができるだろうか。じっさいに遺児たちとつきあう時間がかれに結論づけさせたのは、遺児たちの体験や心情にむきあうF君自身の姿勢、であった。それは、別様に言えば語り手への関心のつよさであり、自らに同様の経験があるなどの属性ではなく、語り手の体験や心情を“知りたい”と求める態度の存在と呈示によって達成される。筆者、今、あなたは「聴く」作業をどのようなものと考えているか。

F君「そうですね、小難しい話ではないと

思うんですよ。よく言うファシリテート能力であったり、頷きとかオウム返しとか、そんな問題じゃないと思うんです、僕のなかでは。そうではなくて、もっと感情的な問題というか。自分がその人にどれだけ興味を持っているか、っていうことが、『聴く』っていうなかで一番大きなウェイトを占めるのかなって。〔中略〕ほんとにこの人は聴こうとしてくれてるんだなという感覚は、向こう〔語り手〕にも伝わると思いますし。だから、心の中の雰囲気が見えたら、あとは、ファシリテート能力であったりその他諸々の技術的な面っていうのは、…、うーん、重要ではないって切り捨てられないですけど、プラスアルファの問題と感じます」。

F君の説明には、聴く作業をめぐるかれが注目する、少なくとも次の3点が述べられている。第一、頷きやオウム返しなどの「技術的な面」。第二、「その人〔語り手〕にどれだけ興味を持っているか」という聴き手の「感情的な問題」。そして第三、語り手の感じる「この人は聴こうとしてくれてるんだなという感覚」、である。頷きなど諸々の技術は、じっさいには、F君の評定いかに係わらず、“自分史の時間”に臨む上級生リーダーたちに「よく言」われる、すなわち習熟することが望ましいとみなされている事からである。それらのうちいくらかは、次節でも紹介される。

しかしF君にとって、それらの技術はいわば副次的なものである。筆者はむしろ、かれのいう聴き手の感情、語り手の感覚の理解にこそ努めなければならない。そこで、わずか

なりと手がかりを得るべく、一計を案じて訊いた。たとえば、筆者に聴き手は務まるだろうか。笑いながらF君は答えた。「自分史語りの場で、“機械的”の代名詞で言えば、カウンセラーとかがいても、たぶんあまり高校生〔一般参加者〕にとっては安心感はないと思うんですよ。機械的に引き出していくみたいな人間は。時岡さんのばあいには、自分史語りの場では機械的になってしまいがちなかなって。なんか人間味が感じられにくいところがあって」⁴⁾。重ねて訊いた、機械的とはどういうことか。

F君「しゃべり方もそうですし。…、たとえば、シニア・リーダーのなかには自分史語りのときに泣く人間とかもいますよね。それは別にわるいことではないと思うんです、僕のなかでは。それだけその人の話を聴いていて、その人のことを真剣に理解しようとしているんだなという姿勢が、それで分かるじゃないですか。そういった部分で感情を出すっていうのは、聴いているんだよってという意味表示…、ま、〔参加者が高校生であることを前提としていえばそのような呈示が〕必要だなと思っているもので。時岡さんの場合、〔中略〕いろいろと質問をするにしても、聴くにしても、本当に心の底から聴いてくれてるのかな、興味持ってくれてるのかなって。僕のなかではそう見える部分もあります」。

自らの不足を衝かれたことはさておき、F君のこの説明は、筆者にたいへん示唆的である。筆者であれば、機械的であってもカウンセラーには冷静であってほしいし、まして私

の話を書いて泣き出したとなれば、頼りなく思うことこの上ない。なぜなら私はカウンセリングを求めているからである。しかし、遺児たちはカウンセラーを求めているわけではない。遺児たちの自分史語りでF君は、カウンセリングなどすべき事態ではなく、語り手「その人」にどれだけ興味を持っているかが問われると考えている。併せて、それらの意思または姿勢は「表示」され、語り手に「分かる」ようにされなければならない。そのようにしてF君は、遺児たちが語るにじゅうぶんな「安心感」をもたらそうというのである。

果たして、このインタビューの後、F君は高校生の「つどい」でシニア・リーダーを務め、かれの構想した「聴く」作業を実践にうつす。筆者はそのごく一部を会場で直接に見聞きし、さらにその後、機会を得てF君自身に詳細を聞いた。それらの紹介と解析に先立ち、次節では、F君が挙げた聴き手の感情や語り手の感覚について、シニア・リーダーを務めた別の二人から訊こう。遺児であるかれらは、それらをどのように捉え、また実践しているだろうか。併せてF君が照準した諸点の妥当性、一般性についても確認したい。

2. 受けとめる、問いかける

本稿をふくむ一連の調査、研究が対象とする遺児たちの「つどい」は、一般参加者からみて上級生にあたるスタッフが、事前の準備期間を経て、役割をいろいろに吟味しながら構成していく過程に特徴のひとつがある。なかでも“自分史の時間”に臨むにあたって行われる研修の機会に、とくに念をいれて各自が考え、意見の交換を重ねる項目は、参加者の語りを聴く心がまえ、およびいくつかの技法である。それらのうち、いくらかは、かれら自身がかつて一般参加者として自分史を語った経験をふり返りながら検討される。

以下では、はじめにCさんから、“自分史の時間”で聴き手を務めた経験を、それに臨んだ心がまえやねらいに照準して訊こう。次いでK君には、ねらいを達成する技法や工夫について、とくにかれ自らが練り上げたそれらについて詳しく訊く。

Cさんは、シニア・リーダーとして班の語りあいに臨んだ経験を、参加者の語りを「もっと聴きたくて、もっと聴くよ、もっと聴くよって思」いながら務めた、とふり返る。

Cさん「受けとめたい、っていう。一人ひとりをみとめてあげたい、みたいな。どんな自分でもいいんやよ、みたいな。たとえば自分史〔語りの時間中〕で、それは話せてもいいし、話せんくてもいいし。話さんっていうのも、それでもいいんやって思って。話せへんくらい辛い思いをした、っていうのを自分のなかで感じてもいいし。やっぱり自分は何も、親のこととか全然知らへんから〔自分史を〕話せんわ。っていうので自分で一箇気づいて、それでもいいんやし、って。なんかうまいこと、親が死んでから今までの自分を、うまいこと話せんくてもいいし。今の自分にとって一番辛いのは親の死じゃなくて犬の死、でもいいし、学校でいじめにあった、とかでもいいし。何でも受けとめるよっていうのは、ほんと、あんたがどんな自分でも、あたしはあんたのこと、もっと知りたいって思うし」。

Cさんの説明は、参加者である遺児たちの経験が多様であることをふまえて、ひとまず納得できる。ごく幼いころに親が他界したば

あい、種類の記憶もなければ、喪失体験にもなう辛い心情なども感じたことがないという遺児は少なくない。とはいえ、そこはやはり、死別の体験を語りあう催しである。犬の死やいじめの経験を話してもいい、またそれを受けとめたいという説明は、喩えとしても難解である。重ねて訊いた。死別体験でなくとも参加者に話してほしいと思うのは、なぜか。

Cさん「〔前略〕こっちが知りたいっていう思いよりも、ちょっとでも楽になってほしいという思いの方が大きくて。で、話してほしいっていうの〔気持ち〕が強かったんですけど。〔中略〕一般的には、ちょっとでも話してほしいって思うんですよね、〔自分史の時間を〕始める前とかは、ほんと少しでも、どんな形でもいいし話してほしいわ、って思うけど、〔いざ自分史の時間が始まり〕その子を見ると、ああ〔辛いなら〕もう話さんでいいわ、って思う〔こともある〕んです」。

先の説明とも併せて、ここでとくに注目したいのは、受けとめたい、知りたいなどというCさんには、しかし、参加者に話してほしい事がらが確としてあるのではない、あるいは努めてそれを持つことを避けているという姿勢である。死別の体験やその後の心情をおもな話題としながらも、参加者が話したいことを話したいように口に出してほしい。あるいは、話したくないと思うのであればその旨を表明してほしい。それらのいずれをも肯定的に聴く、とCさんはいう。そうして「楽になってほしい」、また別様には「すっきりしてほしい」とも彼女は言った。そのような心

もちとは、どのようなものであるか。Cさん自身の語った経験に訊こう。

Cさん「あたしにとっての自分史は…。親の死、今となってはいろんな人に言えるんですけど、その当時とかは、やっぱり、『親はいんで』とか『お母さん、いいひんのや』ぐらいは言えたけど、それ以上の、なんか、なんか…、『髪の毛が抜けて怖かった』とか、…、『おばあちゃんも「疲れた」とか言ってきて』とか、『自分が頑張らなアカんのかって〔思うと〕しんどい』とかって、そんなことまで言ったら、ほんと可哀相な子やって思われるって思って、なんか、お母さんがいんていう事実を、最初は隠してたんですけど。〔中略、それが〕自分史のなか〔自分史語りの時間〕とかやったら、ほんと、思い出して悲しくなるくらいまで…辛くなるくらい話しても、聴いてくれる仲間もいるし。〔中略〕話すことは、すごいすっきりするんですよね、あたし。なんか、いつも溜めてる気はしないのに、何だかんだ言ってあたしは話せてる方って思ったりとか、大丈夫って思ってても、溜めてる感じはしないんですけど、〔話すと〕すごい楽に。〔他で言うのと〕同じこと言ってる時とかあったりしても、やっぱりすっきりして」。

Cさんは母親の他界に由来して、怖い、しんどい、悲しい、辛いなどと自ら形容する心情を味わった。おもにそれらにかんして、口に出して言えない、言いたくないと思う場面をいくつも過ごした。遺児たちの「つどい」

に参加し、それらを話してみたとき、彼女はなにかしら心地よく感じた。それが楽になった、すっきりしたなどと表現された心的状態である。ところで、怖い、悲しいなどの心情はかつてのCさんにとって、端的に言えば弱音であった。筆者の経験的に知るところに依れば、それは一面で愚痴や隠しごとにも似て、口に出して言ってしまうえば胸の支えがおりることもある。とはいえ、厄介なのは、それは愚痴や隠しごとと違って、言えどかく哀憐の情を掛けられることである。ときに後者をつよく求める者もいる、けれどCさんのばあいは、そうではなかった⁵⁾。

前段までをふまえて、Cさんのいうみとめてあげたい、受けとめたいとの願いが意図するところは、概ね次のように諒解される。遺児である参加者の語りをもとめるとは、かれらの弱音を聴いて、しかしその改変をもとめ促すような応答をしないことである。あるいは、かれらの弱みが弱みのままである現況を肯定するとも言い得よう。もちろん、しんどい、辛いなどの言葉を聴いても当惑しない、との含意があることはいままでもない。すなわち受けとめるとは、何よりもまず参加者がそれまで口に出すことのなかった思いの丈を言い放つこと、またそれを臆せず聴くこと、などとも言い得よう。

さらに訊き進めてみると、Cさんのばあい、体験や心情を話したことが、「つどい」を離れて、日常生活の場面にいくらかの効用をもたらしたことも知られる。

Cさん「〔前略〕親の死によって受けたショックとか、寂しい思いしたよとか、ほんと怖かったとか、そういう情景とか、感情とかって、絶対、もう消えないって思うんですよ。でも人間ってというのは、人間に頼ることができ

て。あたしの場合だけかもしれんけど、人に話すことでそこから助言もらえたりとか、自分のなかでも整理できたりとか、話すことですっきりする部分もあるし。〔中略〕自分のなかで穏やかに生活してて、『親のことはもういいんだ、これで』っていうので抑えとくんじゃ、その傷はぜんぜん癒されんくって。ちょっと触れられたら、がーってもう、感情的になってしまって。〔中略、Cさんが〕看護系〔の学校〕に進んでるっていうのと、お母さんが小さいころに死んだっていうのを〔「つどい」で知り合ったのではない、高校の同級生など〕みんなが知ってるから、誰かが倒れたとかっていったら、電話が掛かってきたりとかして。〔それを〕『ああ、そっかそっか』とかって聴いたりとかした後に、〔Cさん自身の〕お母さんが倒れた時とか、入院した時とか思い出したり、〔Cさんの〕曾祖母ちゃんとかおじちゃんとか死んだりした時の、救急の時とか思い出したりして、うわーっとかって泣いて。ああ、怖い怖い怖い、とか、やっぱりみんな死ぬ、周りの人が死んでいくこともあるな、とか思ってすごい感情的になったりとかして。そういう時とかに、たとえば〔「つどい」で知り合った友人〕に電話して、いろいろ話したりとかもできて。そうやって、がーっとならずに、対処できたりとか」。

Cさんは知人から掛かってくる電話を例に挙げ、それをCさん自身の“傷に触れる”ものと説明する。このような経験はおそらく、

Cさんの日常にありふれているのだろう。彼女はその度に「感情的になってしま」う。しかし今や、彼女は「つどい」で知り合った遺児の友人に電話するなどして「対処」することができる。そこではCさんが思うがままに話す話し手となり、電話の相手は「つどい」でCさんが務めたような聴き手になる。

それにしても、少しく想像を交えていえば、Cさんに電話を掛けてくる知人らは前段のようなCさんの事情には構わず、ひたすらに自らの心境の平穏を保ちたいのであろう。かりに過去のある時点で、Cさんが母親との死別を同様に話したいと願ったとしたら、かれらはそれを、Cさんが今そうするように聴くことができたであろうか。またCさんについてみれば、遺児たちの「つどい」で語った経験がなかったとしたら、湧きおこる激しい感情をほかの誰かに言って鎮めるやり方に思い至ったであろうか。電話を掛けてくる知人とCさんとの、過去および現在をまたいでの対照、さらには今日のCさんの『対処』するさまなどからも、「つどい」での経験がCさんにもたらした効用を確認することができる。

またCさんは先の引用に前後して、自分史を話した前後の変化を“前に進んだ”“気づいた”とも形容して筆者に教えた。Cさん「頭のなかで、ぐるぐるぐるぐる、考えてただけやったら気づかんかったけど、〔語ったり、他の参加者の話を聴くと〕あの時、〔自分は〕こういう風に思ってたんやって気づく部分もあったりとかする」。「それまでは、ほんと、入院中のこの姿が怖くて、あの電話の音が怖くて、…、ほんとと死んで、ほんと悲しかったっていうのがすべてやったけど、その悲しかった要素もいっぱいあったな、って増えてきたりとかして。学校の友だち関係もあったしな一とか、それもお母さんのせいにしてたなとか、そういうのが増えてきて。話がふ

くらんでいくみたいな感じで。大きくは変わらないけど、流れとしては、でも、重点を置くところが、最初は死ぬ前の〔入院中などの〕話ばっかししてたけど、死んでから今までの方がすごい辛かったって思っ。だから私の歴史〔できごとそのもの〕は変わらんけど、そのふくらみ具合が違う、みたいな感じです」。体験や心情を思い返し、口に出して言う作業は、Cさんに種種の記憶の再編をうながし、あるいはそれらをあらたに意味づけ、解釈する契機となったようである。

以上Cさんは、筆者に、自分史語りでいろいろを口に出し、言って感じた心もち、くわえてその後、日常生活の場面で「対処できた」という効用の実感、および記憶と解釈の再編されたさまを教えた。それぞれの言からは、「つどい」で語った前後で見れば、従前に比して事後を好ましく考えていることは明らかである。

自分史を話すことへの重層的、多面的な積極的評価を確認したところで、再び、Cさんの聴く姿勢、心がまえに照準しよう。彼女は何よりもまず、受けとめたいと考えた。すなわち参加者が語って得られる心もちのありようを、もっとも優先すべき課題においた。口に出して言ってみないことには、それ以後の効用も再編もはじまらないからである。

ここで、とくに留意しなければならないのは、(初めての)参加者は必ずしも“語ってスッキリしたい”などとは望んでいないという実情である。誰だろう、かつてのCさん自身そのようであった。したがって、Cさんの聴こうとする参加者たちの語りはすべて、聴き手からの働きかけにたいする語り手の応答の果実というべきである。こうして“自分史の時間”のいっさいは、Cさんたちの聴く姿勢につよく性格づけられるのである。

そのような働きかけと応答の過程を、引き

つづき、聴き手の種類の技法と工夫に照準して精察したい。「つどい」における自分史語りは、先に訊いた心がまえや情熱に支えられながらも、具体的にはそれらを伝える技法や適切な工夫によって達成されるのである。

ごく便宜的に大別すれば、技法や工夫には、おもに参加者の語りを促すために施されるものと、おもに参加者の記憶や解釈の再編を企図したものがある。前者は“自分史の時間”に先だつ研修の場で、たとえば、参加者の語りに頷く、視線を合わせて話し手の目を見る、聴き手は話し手のいる方に身体を向ける、などが紹介され、また互いに試行してその意義が確かめられる。そうした技法は一般的に、いずれのシニア・リーダーにも共有されるが、じっさい、かれら一人ひとり、班ごとにまったく異なる語りあいの場面で、状況に応じたそれぞれの工夫によって任を果たそうとする。参加者一人ひとりの心奥に近づき、記憶や解釈の詳細を知ろうとすれば、そうした工夫は必須のものとなる。

K君は、大学生および高校生の「つどい」を通じてつごう3回、聴き手を務めた。経験を重ねるごとに工夫を練り上げ、その実効性のみならず限界についても自覚的である。

K君「僕がいつもやってるのは、“自分もそこに入る”ようにしようとして。誰か〔参加者〕が話している“なか”〔話題に上っている場面〕をずっと思い浮かべて、もし自分がそこにいたら、っていうふうな感覚で話を聴くんですよ。その話している本人に自分になりきって。なんでそうするかっていうと、〔その話し手の語り〕がひととおりにおわった後に、〔司会役として〕質問をいくつかするんです。“引き出し”というふうには

るんですけど。それ〔問いかけの手がかり〕を見逃したくない。最初〔初めての司会役の時〕はちょっと、あまり深く読み過ぎてその人のことを混乱させるのはいやだと思ったんですけど、2回目からは〔中略、参加者の具体的な反応を挙げて〕、そういう部分を見逃したくないと考えて」。

引用中で略した参加者の具体的な反応は、ここでは大幅に組み換えて紹介するほかないのだが、“父親のことは話したくない”という語りの背景に、語り手と父親、ふたりの複雑な間柄があった事例、“父親の死についてはあまり知らない”という語りの背景に、他界の経緯をめぐるいろいろの事情があった事例、などを想定していただきたい。K君は語り手に問いかけ、なかにはそうした対話をとおして胸の支えがおりたと感想を話す参加者もいた。

かれの言う“入る”さまをくわしく知るために、“感情移入”であるとか“自分と重ね合わせる”やり方との異同を訊いた。いずれも違うと、K君は答えた。

K君「自分史を話してる子〔参加者〕がいるんですけど、自分も〔想像の中で〕話してる、その子と一緒にのこることを。〔中略〕聴いて、その子のやっていたことをずっと想像してますけど、その〔K君の想像の〕中に入るのは、その子じゃなくて僕なんです。〔筆者の問いかけに〕自分の経験と重ね合わせるの、まったくしないという訳じゃないんですけど、違いますね。…、その子が話してる、もちろんその子が話してるんで

色々な場面が想像できるじゃないですか。たとえば父親が入院しているっていうんだったら病院の場面。お見舞いに行きました、病院に行っ、父親がベッドに寝ている。…、針だとか見るのがちょっと辛かったな、っていうことを話してもら。病室でお父さんと話している…じゃあそのとき何を話したのかな、と。ひょっとしたら大事なことを話したかもしれない。そのときの、なかなか台詞の部分とかは自分史では話さないじゃないですか〔自分史語りでは、たとえば『病室でお父さんと話したりした』といった程度にしか語られない〕。だからそれを想像して。この子はこう言ったんじゃないかな、っていう感じで。自分の経験とつぎ合わせることはないですけど、でも自分の経験したことしか想像できないじゃないですか。〔中略〕それは僕に、一番聴きやすいし、引き出しのポイント見つけるのにも一番、気づきやすい方法ですね〕。

説明の末尾部分について重ねて訊いた。それにたいするK君の答えもまた、組み換えて紹介すべき内容であるから、適宜、筆者が補って記述していこう。かれのいう「経験したことしか想像できない」との説明は、かれ自身は病気遺児であるから、入院など病死をめぐる起こりうる事ごとについてはそれらの事項を挙げることは容易である。しかし別様の他界の経緯についてはそうではない、という意味である。もちろん、かれはこれまで多くの自分史語りを聴いてきた。それらを手がかりとすれば「いろいろな場面をもって人の話を聴くことができると思う」。しかしそれでも

なお、想像できなかったこともある。父親が自ら他界した参加者のばあい。「僕が〔故人を見ている状況の想像は〕あった〔できた〕んですけど、そこに居る子〔話し手の姿〕が出てこなくて。その時どんな顔してるのかまったく想像できないし。その時どんなふう泣いたのかなっていうのも分かんなくて」。このときK君は、かれの想像できなかった諸点について質問したのだという。

本稿の課題、すなわち語りを聴く作業の理解という関心に添って、K君が教えた“自分もそこに入る”やり方をくわしく吟味していこう。その特徴の第一は、聴き手の経験に照らして語り手の心情を押し量ったり、自分と重ね合わせてみることをしない、という構えにある。むろん、ごく厳密にそれらがなされない、などと断じることなどできないし、する必要もない。そのようなものとしてK君に志向されていることが、ここでみるべき特徴である。そのように聴くことで、生起したできごとと、それに語り手の抱いた感情をより精確に知ることができる。死別の体験やその後の心情は、とかくステロタイプ化して認識されやすいし、自らにつよく印象づけられた死別体験があれば尚更である。しかし遺児たちの自分史語りを聴いて知られるのは、経験のじつに千差万別なさまである。K君の聴き方は、自分史語りの目的にもよく適ったものである。

特徴の第二は、前段のように努めながらも、たほうでは聴き手が自らの経験を、語り手の経験をつかむ有力な手がかりとして参照することである。自分は父親との残された時間を知っていた。語り手は、どうだろう。病院では、医療者たちのふるまいを色いろに感じた。この子の場合は、どうだろう。似かよった経験をもつ者が聴き手を務めて、それに利点があるとすれば、このような手がかりを一つな

りと多く持っていることである。

以上の諸点と、かれが教えた「自分の経験したことしか想像できない」実情とは、まことに具合よく接続される。聴き手がかれの経験をじゅうぶんに整理しておけば、その範囲は自覚され、語り手への過度の感情移入は抑制され、語り手の体験や心情に自らのそれを重ね合わせる虞を注意ぶかく避けることができる。また聴き手はそのように整理した経験の全体像に照らしてみることで、語り手の体験や心情を相対化したり、とくに留意すべき箇所を確認することができる。さらに、これが第三の特徴であるが、聴き手は以上のような熟慮をふまえて、語り手にいろいろの質問をする。そのような質問は、しばしば語り手の心の奥底にふれて、先にCさんの言った“気づき”などをもたらすことになる⁶⁾。

話された場面に“入る”，語られていない事ごとを訊くというやり方と並んでK君が挙げたもう一つの工夫は，“キーワード”への注目である。

K君「“キーワード”，やっぱり拾いますよね、話を聴いてる時。話してる子が、声が裏返ったりする時とか。僕のばあいだと〔K君自身の経験でいえば〕、お父さんのお見舞いに行けなかったのは、ほんとうに後悔している。〔しかし語りでは〕“お見舞い”ということと“行けなかった後悔”までしか言わないとするじゃないですか。だったら〔自分がそれを聴いたならば〕、お父さんのお見舞いに行くのはなんでいやだったのかな、ってふうに〔考える〕。お見舞いに行ったら、父親がこう、負けているのを自分で認めてしまうのかな、っていうのが、僕はそういうの〔抵抗感〕

があったんで。それはなかなか、〔話し手から積極的に話されるよりむしろ聴き手が〕訊かないと言わないじゃないですか。〔また別の角度から〕キーワード話すとき、まわり〔他の参加者〕の反応も見て。その子が反応したら、その子もちょっと引っ掛かるのかな、って」。

キーワードという耳慣れた言葉の印象に反して、K君の説明はやや難解である。かれのいうキーワードとは、たとえば悲しい、辛い、あるいは病気、お金などの具体的な言葉それ自体を意味していない。それは「声が裏返る」など、言葉が発せられたときの語り手のありようと結びつけながら把握されるものである。また、K君自身を例に挙げて説明されたとおり、たとえば「見舞い」と「後悔」といった二つの言葉が話されたばあい、それらを繋ぐいろいろの経緯に留意する。このように、とくに確かめてみるべき箇所を間接的にであれ示す言葉もキーワードであるとされる。

また説明の末尾部分からは、語り手の発した言葉が、ひとり語り手のみを理解するために注視されているのではないことも分かる。自分史語りを何人かのグループで行うやり方は、参加者が互いに語り、聴きあう効果をもつのみならず、進行を務める者が参加者一人ひとりをいっそう多くの側面から理解する可能性をも高めているのである。

K君「〔人数の多さや事前準備の具合によって〕聴いてても、相手に入れなかったりするんですよね。〔中略〕あるときは、なかなか相手に入れなかったんで、まわりの子たちを見て、その反応を見て。あ、かれはこういう話の時に頷いたし、すごい感情的に

なったから、かれにはそういう思いがあるのかな、っていうのを見て。で、〔“自分史の時間”ではない〕空いた時間があったときに、〔個別に話しかけて〕その子の自分史を聴いたりしたら、やっぱりそういうところに引っ掛かっているのかなっていうので〔それを問いかけて〕、話をしたりしました」。

やや補って説明しよう。“自分史の時間”は「つどい」の日程のなかで、はっきりとした時間帯を与られている。逆にいえば、話されたことはその場かぎりにとどめ、以後は興味本位にあれこれを言い立てることは慎むように、申し合わせられる。とはいえ、話題の性格から、グループ全体ではなく個人的に話したい、聴いてほしいと感じる参加者もあり、また激情とともに語ったようすから、相応のアフター・ケアをすべきと見受けられるばあいもある。そのような手当てはあらかじめ、“フェイス・トゥ・フェイスの時間”などと呼ばれて準備されており、シニア・リーダーたちは折をみて、参加者に個別に話しかけるなどする。語り手に“入る”，キーワードを探すなどの工夫の背景には、このようにして参加者に問いかけ、聴こうという心がまえがある。先にK君は“引き出し”と紹介したが、それは自分史語りの時間内ばかりでなく、以後も適宜、くり返されていく。

ところで、K君に訊いたはじめに、聴き手の種類の技法と工夫には、語りを促すためのものと、記憶や解釈の再編を企図したものとがあると述べておいた。K君はおもに後者にかんして筆者に教えたのだが、具体的な語りあいの場面では、そのような細心の観察から得られた知見が、ともすれば形式的に実践されがちな傾聴技法の修正を迫ることもあった

ようである。語りながら、体を震わせはじめた参加者のばあい。K君「震えて、ばーっとしゃべって。そのタイミングで〔話し手の語調に合わせて〕うん、うんっていうのをやると、早くなっちゃうじゃないですか。それは〔頷きが〕“軽い”んじゃないかな、それで〔語りを〕ばって切っちゃったらいやだなと思ったんで。その子のときは、頷かないように。頷かないようにっていっても、聴いているっていう仕草は、ほんとにもう身を乗り出して頭動かすっていうのは、してたんですけど」。工夫は奏効し、参加者は話し続けた。

しばらくして、数人おいて他の参加者二人が落ち着かない素振りをみせた。語りに圧倒されたか、何かしら感じる場所があったのか。「とたん、その子〔体を震わせながら語る参加者〕がそっちを気にしだして。これはまずいっていうんで、なるべくこっち〔K君の方〕に〔気持ち〕いく〔向く〕ようにと思って、『うん』っていう頷きを、大きくした。こっちを見てくれ、って」。これも奏功、しばらく語りは続き、「その子が一所懸命話してるのは周りの子に伝わった」こともあってか、ほかの参加者もよく語ってくれた、とK君はいう。ただ二文字の“頷き”の語に、K君たちは幾多の意をこめる。

CさんとK君、二人の説明を概括しコメントを付す。ここで照準されているのは、Cさんもかつてそうであったように、遺児たちの経験をめぐり、口に出して言うことの困難である。聴き手を務めてかれらが促すのは、言いたいことを言いたいように言ってみる、との行為であった。そうして心地よさを感じ、またそのように語って体験や心情の記憶や解釈が再編されるのも、二人の企図するところである。むろん、すべては語り手が、聴き手のありようを肯定的に評価し、その働きかけに応じなければ達成されない。種類の技法や

工夫はそのために施される。K君らの“引き出し”は、それが適当な、また的を射た問いかけであれば、語り手が聴き手を好ましく感じる契機ともなろう。思いがけない記憶、解釈の再編を経て、口に出していった行為それ自体を肯定的にみるばあいもある。

二人に特徴的なのは、前段の諸事を企図しながらも、語り手の感じる心地よさにもっとも傾注するとの姿勢である。K君「本当にもう、“受けとめる”ってことがやっぱり一番大切だと思うんで。ちゃんと聴いているんだっていうことは、やっぱり目でも分かってもらいたいと僕は思っているんで、ずっとその子から目を離さない」。前節でF君の挙げた語り手の「聴こうとしてくれているんだなという感覚」の獲得は、ここでも課題の筆頭に掲げられている。とはいえそれは、聴き手の側に然るべき姿勢があって事足りるのではない。評定はあくまで、語り手が下すのである。F君の成すべき仕事は、この先にある。

3. 「聴く」という自己呈示

一般参加者を迎える運営リーダー、シニア・リーダーたちは、前日から会場に入り、直前の研修を含めて準備を整える。廊下ですれ違った筆者に、F君は、一服つき合わないかと声を掛けてくれた。かれは筆者に“自分史の時間”のはじめに自身から語るつもりであること、その上で、遺児でない自分が司会進行にあたるのを認めてほしいと請う旨、教えた。果たして、かれは心に決めたとおりに事を進め、「予想以上」の成果をあげた。

それからしばらくの後、F君に訊く。「〔事前に思っていたのと〕若干、違うところがあるとすれば、予想以上に受け容れられたこと、ですかね。やっぱり実際やる前というのは、めっちゃめっちゃ不安だったというのもあって。〔中略〕そういった部分っていうのが大いに

受け容れられて」。最終日に交換する寄せ書きには『『Fさんがどんな立場だってぜんぜん私はそんなこと気にしないよ』、『私が話しているときに、ずっと私を見てくれて、私の話を聴いて頷いてくれてたのがすごい嬉しかった』って書いてくれた子がいて」。参加者の反応は他班のシニア・リーダーと「何も変わらなかった」、とF君は続けた。

F君は人びとの話を聴く機会の多い、ある仕事につよい関心を持っている。それをカウンセリングのようなと形容したこともあったが、しかしカウンセラーを志望しているわけではない。そこで、あらためて訊いた。あなたが“人の話を聴きたい”と思うのは、なぜか。かれは、それが由来するかれ自身の過去の経験について教えた。

F君「一言で言えば〔F君自身に〕聴いてくれた人がいたから、っていうことなんですけど。ま、僕も、“過去の経験”〔詳細は略〕があって、それ引きずって、周りの人間には何も話せないような時期があって。ま、それにたいして、その扉こじ開けて、聴いてくれた人がいて。それが原因〔契機〕になって、〔それまで〕いろんなことがあったけど、今、そのマイナスっていうのをうまく活かせるっていうか、楽しいんですよ、今。むかしは悪いことでしかなかった事っていうのが、なんか、ある意味開き直ってっていうか、〔むしろ〕今の自分に生きて〔いる〕。今の人生、楽しくて。そういうの〔自身の経験〕があって。過去の経験、悪い言い方〔だがそれに〕囚われて生きている人たちに、もっと楽しい人生があるんだって、…、そういうこと

を示したい、感じですかね」。

F君の説明について、本稿の関心からは、かれが何事かを話した経験よりもむしろ、それを「聴いてくれた人」の存在に重点が置かれているさまに注目したい。筆者、聴いてもらうことは、それなりに重要だったということか。F君「あ、めちゃくちゃ重要なことでした。〔中略〕僕にとって、過去の経験は、悪いものでしかなかったし。それをいい方向に転化さしていったのは聴いてくれた人ではなくて自分の作業なんですけど、そのきっかけっていうものを与えてもらった、っていう」。そうして志向した「聴く」務めを遺児たちの「つどい」で担いたいと考えた経緯については、すでに、第1節で訊いたとおりである。以下、本節では、F君が具体的にどのような聴き手であろうとしたのか、またそれらの志向の背景でもある、語る行為にかんするかれの理解について、詳細を訊く。

じっさい、聴き手としてF君が認められたのはなぜか。F君自身の見解に手がかりを求めよう。もっとも強調したのは、自身の“分かろう”“聴こう”とする姿勢であった。

F君「〔前略〕今までだったら、そこに遺児学生が、似たような経験している人間がいるからっていう意識がみんな〔おもにスタッフ〕のなかにあったと思うんですけど、それは、もっと根本的な話をすると結局、そういう立場とかではなくて、そこにいる人が自分の話に耳を傾けてくれる、聴いてくれる、分かろうとしてくれる。…、同じ遺児学生だから話せるっていうのも、分かってもらえると思うから話すんじゃないですか。〔中略〕根本部分は、分かろうとしてく

れる人がいるから、理解してもらえるんだっていう意識が生まれて、話せる、と思うんです。僕は、誇張する訳じゃないんですけど、真剣に聴こうとしてたんです。自分なりに理解しようと思ってましたし、それも態度に表してたと思う。だから、話をしてくれたかなというのは思いません」。

F君の答え全体をみると、聴き手の心がまえについて厚く、種類の技法については二義的であるかのように話されている。しかし、筆者の判ずるところ、そのような説明は、技巧への過度の傾倒をいましめるF君の主張に拠るものである。かれは“真摯な志さえ持っていれば事は成る”などと考えているはずがない。なんとなれば、それがどの程度「態度に表」れていたかについても、はっきりと自覚的なのである。

かれの挙げたいまひとつは「信頼」である。とりわけスタッフから寄せられる信頼がカギになる、と。F君「〔前略、「つどい」を〕一緒に作っていくスタッフたちの信頼を得ることって、「つどい」のなかで班員の信頼を得ることに、ものすごく深いかかわりがあると思うんです」。それを見据えて、この一年間、遺児たちとともに活動してきた。「まわりの子〔スタッフ〕たちが自分〔F君〕を信頼してくれているって、それこそ雰囲気で〔一般参加者に〕伝わると思うんですよ」。F君のこの説明には、聴く作業の本質のみならず、語る行為の本質に迫るためにも吟味すべき数多が含まれている。それらのうち、ここではF君が、スタッフからの信頼が参加者に伝わると考える点、およびそれが参加者の語りを左右すると考える点に注目したい。スタッフは言うまでもなく、遺児である。かれらがF

君に寄せる「信頼」とは、遺児たちの「つどい」にたいするF君の理解がじゅうぶんに好ましいものであるという承認を意味している。F君は一般参加者に先だち、かれらと同じ遺児たちからそのような承認をあらかじめ取り付け、それを存分に呈示したのである。そのようにしてF君は、いっそう自覚的に、語り手となる参加者に自らの聴き手としての適性を訴え、スタッフと同様の承認（即ち「信頼」）を得るべく働きかけている。

語り手となる参加者たちに向けたF君の発信は、前段までのようにして醸成されたかれへの好意的評価をふまえ、語りを聴く作業のなかでも引きつづき行われた。筆者の、参加者の話を聴いて何を感じたり思ったりしたか、との問いに答えて。

F君「考えていたことといえば、答えになるか分からないですけど、その子の心のなかにずっと共感してたっていうことがひとつと、あとは、話を聴きながらその後の質問「先にK君がしたような」とか、そういったものを考えるとき、この子はこういったところが気づけたら、これから生きていく上で、何か、前に進んでいけないんじゃないかなとか、そういうことをずっと考えてた…ぐらいですか」。

語り手の詳細は述べないが、F君がここで考えたのは、たとえば、父親が他界後、遺された母親にたいして遺児が思いを致すようになれば、遺児自身の心境に変化が起きるだろう、などである。機会をみて、お母さんはどんな気持ちでいるだろうね、などと問いかけるのであろう。F君は、ここでもやはり、取り立てていう程のことはない風を装って筆者に答えた。しかし、かれは語り手に問いか

る。それは、私はあなたの語りを聴いています（した）との表明に他ならない。またその内容の如何は、聴き手が語り手に「共感」する具合をあからさまに呈するものなのである⁷⁾。

F君の教えたもうひとつは、語り手が語り終えて心地よく感じるための配慮である。筆者の、語りたいて思ってもらうための工夫はあるか、との問いに答えて。F君「…、あまりないといえば、ないんですけど。ただ、話せた後に、『話してくれてありがとう』だとか〔の声を掛ける〕。手を繋いでみんなと気持ち共有するとか。話せてよかったなっていう、そういう空気は、やっぱ意識して、作っていかうとは思ってました」。いまやF君は、語り手への共感の呈示からさらに進んで、語り手が自身の語った行為を肯定的に評価するよう促すというのである。

このように、自分史語りの最中はもちろん、その事前、事後を通して、F君は語り手である一般参加者に向けていろいろに発し、また促す。煩瑣をいとわず再掲すると、それらは、話してよい相手であるとの承認を求めて、分かろうとする姿勢の認知を求めて、聴いている、共感しているさまの呈示として、話してよかったとの判断を導くために、時どきにに応じて工夫される。F君は参加者たちの語りに、たんに耳を傾けたいのではない。語り手に、以上のように認知させ、あるいは判じるようにして聴きたい、というのである。

そのようにして聴きたいと考えるのはなぜか。その答えもまた、F君自身の過去の経験のなかにあった。順を追って辿ることにしよう。先に、聴き手としてF君が認められたのはなぜかと筆者が訊き、真剣に聴こうとしていた〔から〕とかれが応えた、そのやりとりが続けて重ねて問うたのに応えて。筆者「真剣に分かりたかったのは、なぜ？」

F君「すごい質問ですね。〔中略〕聴くのは当たり前だと思ってる。〔中略〕自分自身の経験とかからなんですけど、人に分かってもらえないことの辛さとか、そういったものを実感してきましたし、それにたいして聴いてくれる人の大切さというのもすごく実感してますし。だから、自分自身の経験っていうのを話してくれる子がいるのに、自分がそれをないがしろにする訳にはいかないですよね」。

なかば啞然として応えたF君に詫びもせず、筆者はさらに重ねて問うた。これほどまでに真摯な気持ちのF君でさえ、本節冒頭で訊いたとおり聴き手を務めて「めっちゃめっちゃ不安」に思ったことの不思議を感じたからである。筆者「そのF君が感じた“不安”というのは、何だろう。そのF君にさえ持つかもしれない、かれら〔一般参加者〕の…、何て言うか…」。言葉を選びかねる筆者を気づかい、F君は話を継いでくれた。

F君「ま、そういった思いがあって、それを伝える自信というか、があって、ただ、不安だったのは、壁というか、固定観念、…そういった確立された思いを打ち崩すというのは、僕には難しいって感じてた部分があって…。ま、思い通りにはいかないだろうな、という…不安ですよね」。

さらにいえば、「そういった確立された思い」は、かつてF君自身にもあったのだ、とも。筆者は急ぎ質問を続けた。それはどのようなものか。F君の答え。ひとつは「言っても分かってもらえない」という思い。いまひ

とつは「話すことによって、自分の周りから人がいなくなるんじゃないかとか、迷惑かけるんじゃないか、同情される、嫌な思いさせられるとか」いう怖れ。ふみこんで訊くと、実体験の場面で両者は互いに独立でなく、前者は往往、後者を誘発して語り手の落胆をつよめるものであるらしい。そうした経験の果てに、いきおい人は「臆病になる。F君はこのようにして「話せなかった自分というのをずーっと抱えてた」のだという。

F君の説明は、ひとまずは筆者に、直感的かつ字義的にのみ理解された。しかし、そのような「確立された思い」を「打ち崩す」べき「壁」と表現するかれの深意は、前段ふたつの心情が混然として、あたかも窯変したかの如く生まれた、もうひとつの心情にこそあるとみななければならない。「分かってもらいたくない」という、一種の憎悪である。

F君「たとえば、自分の話で言いますと、僕は、自分が一番不幸な人間だと思ってて。で、周りの人間っていうのはものすごい幸せそうに見えてたんですよ。で、周りの人間に対して、僕はずっと、…、憎しみっていうか、ま、殺意というか、そういうものも含まれているんですけど、あいつらだけなんで幸せなんだ、それに比べて自分は…。そういうお前らに何が分かったよ、分かってほしくねえよ、っていう怒り…という部分も、…。人にもよると思いますけど」。

少しく手間をかけて、丁寧に、F君の考えを辿ってきた。そうして行き着いたのは、先にみたように聴こうと努めるF君が前提した、語り手の心境である。今一度言うが、これらはみな、F君自身の心的経験にもとづいて付

度されている。たとえ語ることに意義があると結論していても、F君にはそれ以上に、語ることへの躊躇が心底から感じられるのであろう。かれの種類の呈示、促しはいずれも、語る行為をめぐる語り手のそのような心的負担を和らげるために工夫されていたのである。

語り手の事情にかんする認識は、併せてF君に、自らの聴く作業をいっそう長い時間軸の上に位置づけてみる視座をとらせた。そうして得られた知見のいくつかを訊きながら、F君の聴き方の特質と、その背景にある“語る”作業をめぐる認識とを綜じていきたい。

あなたにとって「聴く」とは何かと問う筆者に、F君は応える。「その人っていう人間をみること、なんですよ。〔中略〕たとえば“親を亡くしたこと”って、この子にとってどういう経験だったんだろう、とか。親を亡くしたことで経験してきたこと、その一つひとつの表面的なものを掘り下げたところにある」。また、今回の「つどい」では「種を植えた」というかれに、種とは何かと問うた。F君「“自分を知る旅のお手伝い”みたいなこと〔中略〕。自分史を話すにしたって、いきなり、自分の今まで気づいてなかった部分にすべて、ぼんぼん気づいていけるわけではないじゃないですか。〔中略、だから〕その子が考えることをサポートするっていう意味で質問を〔も〕するんですけど。そうやって考えて気づくことのお手伝い」。また別様には「きっかけ」とも言うべきである、と。

すでに本稿の大半を費やして、参加者たちが体験や心情を口に出して言うのを促すためにF君らが苦心するさまを描いてきた。F君はそうして語る行為が語り手の自省の契機になると考え、翻って、自らの聴くという作業をそれに資すべきものとなるよう構成したのである。聴き手はさながら鏡のごとく、語り手の像を映してみせる。そのときF君は、い

くらかの補助線や傍点をくわえ、あるいはループを添えて返す。語り手がそれらを視認できるか否かは、語り手の側の事情と、かれらがF君に寄せる「信頼」とに左右される。

筆者はまたF君に、あなたの“聴いた”作業を、それ以外の語を用いて表現してほしいと頼んだ。かれは「明かりをともした」などと言った後、含意を教えた。

F君「自分〔語り手〕のなかに確かにあるけども、今は暗くて見えてない部分に、たとえばスポットライトをあてるとか。そういう意味で、明かりをとます。〔自分にそれができたとは言い切れないのでやや控えめに言えば〕その子自身が、今まで見えてなかったところにスポットをあてていくことを、サポートした。〔筆者、サポートとは何か〕たとえば、質問をすることであったり、ま、たんに相づちを打つことであったり、オウム返しとか、目を見るとか、そういうことでも、〔語り手が自身について〕考えることを円滑に進める上でひとつの潤滑油になっていくものです。それもひとつのサポート、って捉えてますけど」。

訊いて筆者に新鮮だったのは、ともしれば過度に傾倒するスタッフもいると指摘していた種類の技法を、かれの「聴く」やり方のなかに位置づけてみせたことである。それらは語り手がかれら自身を対象化するに際して、はじめて意義を認められる。逆に言えばF君は、そのようなものとして、いわゆる傾聴の技法を解し用いている。

ところで、上段ではF君が、語り、聴く作業に「きっかけ」の形容句を与えたと紹介し

ておいた。それは筆者の出会った上級生スタッフたち皆がくり返す用語法で、“自分史の時間”を独立の対象として議論しがちな筆者は、その誤りを諭されてこの語をいく度も聞いた。F君はさらに別様に、自らの聴く作業を、語り手と「ともに歩く〔こと〕」であるとも説明する。F君「〔ともに、とは〕聴くという行為ではなくて、その先に、その子の人生を見据えて、その子と一緒に、横に並んで人生を歩んでいくようなイメージ」。むろん、じっさいにかれらがともに人生を歩んでいくことなど、あろうはずもない。ここでいわれているのは、F君が提供を目指す「きっかけ」の射程と照準である。

F君は、相当の長さをもった時間軸上にかれの仕事位置を置く。「人を点ではなくて長いスパンで捉えたなかの、ひとつの地点としての『聴く』。こういう経験をしてきたんだ、こういう人間なんだなとかを聴く、から始まって、こういうところが変わってほしいからこういうアプローチをしていこうと考える。そういう流れのなかの、きっかけ、スタート地点っていうのが、僕にとっての『聴く』」。これもまた、むろんのこと、心構えをいうのであって、限られた時間に全ての「アプローチ」が達せられているわけではない。

とはいえ、筆者の未熟によって、読み手に『Fはたいそうしょってる輩だ』などの印象を与えることを怖れる。かれはひろい視野のなかに“自分史の時間”を置くが、それは遺児の「つどい」をごく限定的な出来事とみるがゆえの判断なのである。F君「聴かれること自体、聴かれて何か話すこと自体、そんなにたいした意味はないんです。〔中略、しかし〕僕のばあい、聴かれたっていうことは、いわゆる孤独っていうものに閉じこもって自分のことを分かってほしい人がいたっていうことは、ものすごい、おっきな経験だっ

たんですよ。僕にとって聴かれたっていうことはものすごい価値のあったことで。それ自体が」。約言すれば、参加者らに、かれらの話を聴きたいと思っているF君自身の姿を見せること。それこそがF君の目指すところであり、種類の工夫の向かう先である。

語りとその聴き手をめぐる理解の全体は、「つどい」にたいする評価へと集約される。

F君「ある意味、すごい価値のあることで、ある意味たいした成果はないことだ、って思ってるんですけど。〔中略〕「つどい」が終わる頃って皆、いい顔してて。ただそれは、流れのなかで、ある意味、なかば強制的にっていうか、ある意味マインドコントロールされてその顔が生まれてきているのかな、って思うんです。その人の人間っていうものが劇的に変わってそういう顔が生まれたのではない。人が成長することも、変化していくことも、そう爆発的に起こるものではないって思うんですよ。「つどい」3泊4日で一気に人間ってものがガラリと変わるっていうのは、不可能だって思っています…。ただ「つどい」っていうものは、話せたっていう結果が後々、ものすごい価値を生んでいくものだ、って思ってた。参加した人間が、もっと自分の内面にふれて、もっと自分について考えて、はじめて価値の生まれてくるものだ、って思っているんで」。

ごくわずかの時間のなかで、聴き手にたしかに為し得ることは、唯、自らを呈し応答を待つことのみである。しかし、また、併せてたしかにすることは、いかな語りとその後の数多

は、何より聴き手にこそ存するのである。

おわりに.

遺児でない聴き手、遺児である聴き手のいずれにも訊いて知られた、遺児たちの「つどい」で自分史語りを「聴く」作業の諸特性を綜じる。

遺児たちの「つどい」では種種に講じて参加者に語りを促すのだが、あたかも十分条件のように採られる方途のひとつが、“互いに遺児どうし”という類似性の強調である。しかし、遺児でない聴き手の参入過程に照準して知られたとおり、「聴く」作業の根幹はいわゆる傾聴技法などの技術的側面、語り手に向かう関心のありよう、および語り手の聴き手にたいする評定の如何から構成される。遺児である聴き手は、とくに後二者についてその占める位置や大きさを、自ら語った経験から体得していることが多い。

聴き手は何より、語り手の心地よさを宗とする。聴き手のありようが“受けとめる”などと表されるのは、聴き手の作業はなべて、参加者が思いの丈を言い放って得られる心もちに向けて構成されるべきとの含意による。また、聴き手がいろいろな“問いかける”のは、直接には、語り手の体験や心情の記憶、解釈の再編を企図している。とはいえ、聴き手はかつて語って自らに起こった再編を好ましく判じており、したがってこれもまた、語り手が語って知る心もちに照準した作業に他ならない。

聴き手が苦心して求める語り手の心地よさとは、また別様に表現すれば、自らの語った行為にたいする肯定的評価である。実体験の有無によらず、遺児たちは、自身の経験談が相手を困惑させ、甚だしくは遠ざけてしまうのを怖れる。じっと耳を傾ける、適当な質問をする、話し終えた語り手にじゅうぶんな礼

を尽くすなどの作業は、語り手の怖れが除かれて生まれる心地よさを求め、施される。それは、語り手が言い放って感じる心地よさとは、つよく結ばれながらも、異なる心情である。

以上の諸点に共通してみられる、聴き手を特徴づける作業は、自覚的、積極的な自己呈示である。先にふれた類似性の強調は、まことに端的な呈示の一方途である。ただし、本稿の関心からして、属性の類似に由来する色いろの共感のうち、とくに注目すべきは適当な聴き手の不在である。遺児たちにとって思うままに話す機会は些少であるが、それは聴く者の不在と同義である。聴き手が、自らの存在をこそ知らせるべきこと。「聴く」作業の本質は、そのようにも約言される。

今後の研究課題について、一点、述べておきたい。「聴く」とは、すぐれて能動的な作業である⁸⁾。“語る”作業は「聴く」という発信にたいする応答として理解されるべきである。聴き手は必ず、語り手に先んじて在り、聴き手なくして語りはない。筆者はこのような観点から、これまでに訊いた遺児たちの“語る”行為を再解釈しなければならない。

註

- 1) 遺児たちの「つどい」について、近年の状況は自死遺児編集委員会・あしなが育英会編(2002:234-49)を参照されたい。
- 2) インタビューの実施日は次のとおり。F君, 2004年8月10日, 2005年6月29日, 10月14日, 2006年2月13日。Cさん, 2004年12月15日, 21日。K君, 2005年10月15日。いずれもテープ録音により記録した。当時, F君は大学3, 4年生, Cさん, K君は大学4年生。
- 3) 参加者のあいだに生まれる「安心感」は、自分史語りの前後で性格を異にする。すなわち事前には遺児ばかり集まる状況に、事後には互いに語り、聴いた経験に由来して、それぞれに醸成される(時岡 2004)。ここではおもに事前のそれに照準

している。

- 4) いうまでもなく、F君、筆者がここで用いる「カウンセラー」の語は、学術的に適当な理解にもとづくものではない。ましてそれを「機械的」と形容するのは甚だしい誤りである（平木（1997）などを参照のこと）。とはいえF君の誤用を正すことも、また、本稿の目的ではない。読み手にはこれらの事情を諒解いただきたい。
- 5) Cさんの説明にたいする筆者の解釈には、精神科看護の臨床場面からなされた報告（坂田 2001）がたいそう役立った。坂田に倣っていえば、Cさんには「こころのごみ」を捨てる「ごみ箱」が必要だったのである。
- 6) ここでも筆者には、精神科看護からの報告（林 2001）が役立った。K君の質問が語り手の「心の奥底にふれ」るためには、それに先だて「聴く」作業が不可欠であり、それから独立しての質問はあり得ない。
- 7) 註4）、6）を補う意味からも、F君のこうした問いかけはじゅうぶんに「カウンセリング」的であることを指摘しておきたい。カウンセリングの場面では、クライアントの「聴かれている実感」を前提にしてこそ「言葉かけ」が意味を持ち、併せて「言葉かけ」そのものが「聴かれている実感」に影響を及ぼすと考えられている（本間（2006）など）。
- 8) 「聴く」作業は、その受動性のうちにも大きな意味を持つ。「<聴く>というのは、なにもしないで耳を傾けるという単純に受動的な行為なのではない。それは語る側からすれば、ことばを受けとめてもらったという、たしかな出来事である」〔傍点時岡〕（鷺田 1999:11）。しかし筆者は、本稿から得た知見にもとづき、聴き手の種類の呈示をもってそれを「能動的」と形容したい。その妥当性の吟味もまた、今後の研究課題である。

文献

- 自死遺児編集委員会・あしなが育英会編、2002、『自殺って言えなかった。』サンマーク出版。
- 坂田三允、2001、「語りを聴くことを学ぶということ」『精神科看護』28(7):17-21。
- 時岡新、2004、「『当事者グループ』経験の諸過程——遺児たちの『つどい』に取材して——」『社会学ジャーナル』29:199-217。
- 、2006、「分かちあいの会で語りを『引き出す』

作業について——遺児たちの『自分史語り』のばあい——」『金城学院大学論集 社会科学編』3(1):1-14。

林和功、2001、「『語り』に導かれる援助」『精神科看護』28(7):13-6。

平木典子、1997、『カウンセリングとは何か』（朝日選書586）、朝日新聞社。

鷺田清一、1999、『「聴く」こと力——臨床哲学試論』TBSブリタニカ。

※本調査、研究は財団法人東海学術奨励会による研究助成（平成16年度）を受けて実施されたものである。